デボラ・ボーナム

■ DEBORAH BONHAM INTERVIEW

ジョン・ボーナムの実妹デボラ・ボーナムの新作がリリース 70年代ロックのテイストを連想させるその音には彼女のルーツが込められている

今は亡きツェッペリンのオリジナル・メンバー、ジョン・ボーナム。その実妹のデボラ・ボーナムが新作をリリースした（輸入盤）。甥であるジェイソン・ボーナムとも音楽活動をする彼女に新作とジョンのことを聞いてみた。

◎

1985年にリリースされたデビューアルバム『For You and the Moon』を聴いたことがありません。そのときあなたはどういう歌を歌っていたのでしょうか？

いわゆる80年代風ロックをやっていたと思うわ、だから私が今やっているような音楽とは違うの。でも当時レコード・レーベルとちょっとトラブルがあってね、だから自分なりに踏ん切りをつけて（このアルバムにこだわることなく）私は先に進むことにしたわ。

そもそも私が音楽を始めたのは――昔からよく甥のジェイソンとプレイしていたけどそれは子供同士が家の中で遊んでいるようなレベルだった――兄のジョンが亡くなった頃、私はもっとロックンロールを歌いたいと志すようになった。それまでも少し学校で歌ったりはしていたけれど特に真剣にやっていたことではなかったわ。でもジョンが亡くなって、私なりにその気持ちのやり場が欲しくて歌に向かっていったのだと思う。そこで私の歌を聴いてどう思うか感想を言って欲しいとロバート・プラントに訊ねたのよ。彼は私たちの家のすぐ近くに住んでいたから、彼のところにある小さいスタジオで私もデモを作らせてもらったわ。ジェイソンや現在私のベーシストを務めている友人らも加わって一緒に取り組んだの。それでCarrere Recordsと契約を結んで作ったのが『For You and the Moon』だった。その後もクラブで演奏活動を続けていたわ。

2 nd『The Old Hyde』（04）を聴いてロック、ソウル、R&B、ブルース、カントリーなどのテイストを強く感じました。これらがあなたの音楽ルーツになるものですか？

その通りよ。私は兄の聴いていた音楽を聴いて育ったから。一緒に住んでいたのでね。The Old Hydeの農場に兄や父たちと私は暮らしていたのよ。そこにはいつも音楽が溢れていて…。ジョンはあらゆる音楽を聴いていたから、膨大なレコードのコレクションを持っていたわ。だから私もかなり小さい頃からジェイムズ・ブラウン、アレサ・フランクリン、ジャニス・ジョップリン、ジミ・ヘンドリックス、CSN&Yなど本当に様々な音楽を聴いていた。リトル・フィートとかもね。私はカンサス、ヴァン・ヘイレンみたいなロック寄りのバンドも聴いてきたから、本当に多様性に富んだ音楽を聴いて育ったのよ。それら全てから影響を受けた結果として、自分が愛してきた音楽を私自身の音楽にもあちこち反映させていると思うわ。今作の『Duchess』もこの延長線上にあるわね。前作を発展させたような作品だと思う。

アルバム作りはどのようにしたのですか？　前作と今作にはロバート・プラント・バンドに参加していたロビー・プラントも参加しています。

彼は本当に素晴らしいわね。レコーディングに関しては、まずは私、ジェイソン、ギタリストのピーター、ベーシストのイアンで一緒にトラックをやっていくの。それからゲスト・プレイヤーを迎えて――ロビーのようなね――やってもらうわ。でもロビーも大変近しい友人なのよ。前作ではミック・フリートウッドも来てプレイしてくれた。何より今作で私にとって本当に嬉しかったのはポール・ロジャースが参加してくれたことよ。頑張っているうちに評価もされるようになり、そのお陰で彼らのような素晴らしいミュージシャンが参加してくれるようになった。だからアルバムを出していなかった期間は、あたかも私が全く活動していなかったように見られるかもしれないけど、そうじゃないのよ。その時の努力が今、実を結んだのだと思う。

ポール・ロジャースの名前が挙がりました。彼は親切ですね。私たちの雑誌にもとてもよくしてくれます。

彼は本当に素敵な人よ。こんな人は滅多にいないってほど素晴らしい人なの。その彼が私のレコードに参加してくれて凄く嬉しかったし本当にワクワクした。出来れば彼と一緒に日本に行けたら最高よね！　彼にもお願いしているのよ、「私を日本に連れて行って！」って（笑）。

ソウルフルなヴォーカルからジャニス・ジョップリンも連想しましたが、あなたの歌のほうが女性らしい柔らかさがあります。

私もジャニス・ジョップリンは大好きだわ。あと私はスティーヴィー・ニックスの大ファンなの。そしてアレサ・フランクリン等のようなソウルも大好き。彼女等から受けた影響全てが少しずつ反映されて、こういうスタイルで歌っているのだと思う。でもあなたの言う通りに私はそれをよりソフトな形で表現しているのでしょうね。

このアルバムは全米デビュー作になるそうですが。

本当に嬉しいし、待ち遠しいわ。先ほどから言っているように本当にこうなるまで長くかかったけど遂にレコードがリリースされることになったわ。日本でも発売されるから、これを機会に是非今度こそ来日できたらなあ…

あなたのお兄さんであるジョン・ヘンリー・ボーナムについて、今語れる思い出を語ってください。

家ではとても家族思いの兄で、家族のことや農場で忙しくしていた。…兄のことで凄く印象に残っている日があるわ！ある日兄はパブに行っていて、私と母でいつものようにジェイソンの面倒を見ていた。私が15～16歳のときだった。そのうちママも寝室に行ってしまったから、私はひとりでそこにあった兄の膨大なレコード・コレクションをチェックしていたわ。私はヘンドリックスのレコードを見付けて「これは誰だか知らない」と思って聴いてみたの。そこへジョンが帰ってきて「お、ヘンドリックスを聴いているな！」と言って私のところへ来たわ。「彼は凄いだろ？　ちょっと待ってて」と言ってからジョンはどこかへ消えて…まもなくビデオを持って戻ってきた。それはジミ・ヘンドリックスがワイト島のフェスティバルに参加した際の映像だったわ。２人で何か一緒に飲みながらそれを観て、彼はヘンドリックスの偉大さをずっと語っていたわ。「ここ観て！」「これ凄いだろう、どうだい？」みたいにね。私も「わー彼って凄い！」とはしゃいでしまった。素晴らしい晩だったなあ…２人一緒に座ってバンドのビデオを観たあの日は凄く印象に残っている。２人で音楽の世界を楽しんだわ。彼はとても面白い人でユーモアのセンスもあったのよ。だから明るく楽しい家族だった。ツアーのエピソードで耳にする逸話とは別人みたいな兄だった。家ではそういう人じゃなかったので。

お兄さんは家でもよくドラムを叩いていましたか？

いつもプレイしていたわ。私たちが住んでいた敷地内にはコテージが沢山あったの。The Old Hydeのメイン・ハウスにジョンたち家族が住んでいて、私たちはその裏にあるファーム・ハウスに住んでいたわ。だから直ぐ近くに住んでいたのよ。家族はとても仲が良かった。夏には彼が使っていたミュージック・ルームに家族が集まり、その部屋のコーナーに置いてあるジューク・ボックスを皆で聴いて楽しんだわ。ジューク・ボックスにはあらゆる音楽が入っていたからジョンもそれに合わせてドラムを叩いたりしていた。そういうふうに彼はいつもプレイしていたわね。

昨年末にレッド・ツェッペリンが再結成したでしょ？　ジェイソンが兄の代わりを務めたわ。本当に驚くべき素晴らしさだったと思う。ジェイソンも信じられないくらい良かったわ。だからきっと兄も喜んでいるわね。私は兄がいつも見ていてくれると思っている。

（永田　裕　通訳・山岡優子）

デボラ・ボーナム
DUCHESS
ATCO　R2-452476　発売中　輸入盤